

書 評

ブライアン・ハリスン著

「東南アジア小史」

永 積 昭

Harrison, Brian.: *Southeast Asia, A Short History*. London, (MacMillan), 1954. xi+258p.

東南アジア史の研究の成果は、その各時代、各地域にわたつて、おびただしい數に上つてゐるが、それらの業績を充分に消化した上で東南アジア全體を網羅した歴史概説を書くこと云うことは、至難のわざであつた。

それは、第一には、この地域の持つ地文的な、また人文的な複雑性によるであらう。とくに先史時代以來の數次にわたる民族移動によつて、世界にも比をみないほど錯雜した民族構成を持つに至つたことや、古くはインド及びシナの兩文化圏に影響を受け、その後次第に回教文明が流入し、十六世紀

以降は西洋諸國の進出に委ねられたことなどが、先ず考えられる。これらはどの一つを取つてみても、またその把握と云うことを別として、純粹に敘述だけの事柄として考えてみても、簡單なものではない。

また、第二には、ホール氏も述べてゐる様に、「東南アジア」と云う名稱が、一般に用ゐられる様になつたのは第二次世界大戦中からのことであり、(Hall, D. G. E.: *A History of South-east Asia*. London 1955. p.3) それ以前には大陸部と島嶼部を含むこの廣大な地域を、一體として把握し、かつ敘述すると云うことが行われなかつたためでもあらう。しかし第三には、問題は、名稱の如何だけではなかつた。單に便宜上から或る地域の概史を書くこととは、不可能である。問題は敘述によりもむしろ把握そのものにかかわるであらう。云いかえれば、この「東南アジア」に共通する或る等質なもの、廣い意味での文化圏を予想することなしには、敘述は統一を得ることが出来ない。事實、ジョルジュ・セデス氏の *Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*. Paris 1948. などは、そう云う立場で書かれたものと見てよいであらう。従つて、この新しい呼び名にふさわしい歴史概説とは、單にそれらおの／＼の地域の歴史を、連絡もなく、横に並列しただけのものではなかつたし、一方、全

體を一つに扱っているとは云え、いささか時事的すぎる、ガイドブックの類でもなかつた。

ところが、最近になつて、このハリスンの著書と、ホール氏の「東南アジア史」(前掲)が、それ〴〵一九五四年、五年に、相次いで出版されたことは、誠に意義ふかく、吾々はこの兩書から多くの便益を蒙ることとなつた。勿論この兩書とも、東南アジア史の敘述そのものについての前述の課題に、充分答え得るものとは云えない。一言にして云えば、ホールは、より詳細ではあるが、まだ並列的な「各國史」の面影を少し留めて居り、これに比してハリスンは「東南アジアは政治的にも文化的にも一體をなすものではないが、その社會構造は多くの共通なものを持ち、その過去の歴史と現在の政治とは、多くの相似た所を示している」、と緒論の中にもある通り(5頁)一貫した把握を試みながらも、具體的な歴史事實を網羅する點では、いささか劣るところがある。ハリスン氏はその序文に於て「これは、一般の讀者及び歴史の學生のための本であつて、専門の學者のための本ではない」と述べているから、一應無理からぬ所ではあるが、ホール氏が東南アジアの地域から除いたフィリピン諸島までを、二百六十ページ足らずの本の中に、織込んでしまったことは、——その事自身には私はむしろ賛成であるが——この困難を一層大

きくしている。あまり類書のない現在、「詳しくない概説」の缺陷は必ずしも小さくないであらう。そこで、それ〴〵性質の異なる兩書を比較検討しながら批評するのが本當であるが、ホールは現在、南方史研究會に於て輪讀の最中であるので、こゝでは、とりあえずハリスンだけについて、批評することにした。

著者、ブライアン・ハリスン(Brian Harrison)は、以前はマライ大學の上級講師であり、現在、香港大學の歴史學の教授である。吾々の知り得る彼の經歷は、今の所それだけであり、この書以外の研究業績については、残念乍ら知ることが出来ない。さて、本文は二五七ページ、それに短い序文と、これも僅かに三ページの緒論がつき、巻末には、簡単な書目と、本文の索引とを附している。ともかくも概説書としての體裁をととのえては居るが、書目は、「最近の業績を選択したリスト」と云う副題が示す通り、網羅的な書目と呼ぶには程遠いものであり、ホール氏が、同様に Select Bibliographyとして巻末に附した三十ページ足らずのリストに比しても、かなり見劣りがする。スペースの關係上もつともな事ではあるが、本文が短い場合に一層必要なのはよい書目、——無理ならばせめて他の書目のリスト——であるから、これをもつと充實させたならと惜しまれる。一方、索引は比較的

よく出来ていて、固有名詞のみならず、香料、米、金、錫など、重要な商品の項目をも立てているのは、なか／＼便利である。(ついでに、これは本文に關してであるが、いろ／＼な歴史事實や、地名民族名の考證ないし比定に於てさえ、出典と論者の名とを殆ど明記しないのは、如何に入門書とは云え、あまり周到とは云えない。)

本文は十八の章から成る。即ち、

- 1、東南アジアの民族構成
- 2、初期のシナ及びインドの影響
- 3、初期のインド化された諸國——フナンとシュリヴィジャヤ
- 4、インドシナ半島のインド化された諸國
- 5、スマトラ及びジャワの、インド化された諸國
- 6、回教の到來
- 7、西洋諸國の到來
- 8、ポルトガル人の世紀
- 9、オランダ人、イギリス人の渡航開始
- 10、十七世紀のヨーロッパ會社貿易
- 11、十八世紀の商業と抗爭
- 12、新しい勢力均衡の形成
- 13、イギリス、オランダの利權の増大

- 14、新しい植民政策の開始
- 15、資本と發展
- 16、人口と福祉
- 17、民族主義の成長
- 18、戰爭の餘波

であり、これを見ると、西洋諸國の來航までの所を、六つの章で片附けて居り(それも第一章は民族分布の概観である)あとの十二章を十五世紀以後の敘述にあてている。ページ數から云えば、全體の約四分の三を占める。東南アジアの植民地化の過程を詳しく述べようとする著者にとつて、當然のことであり、歴史事實の重さに相應した配分と云うことが出来るが、一方、ます／＼紙數を削られた前半の出來榮えが、かなり不滿なものとなつたことも蔽いがたい。

著者は、序文の中で、この本を書くに當つて参照した多くの人の研究業績に觸れながら、なかでもジョルジュ・セデス教授の名を一人だけ擧げて、とくにその學恩を謝している。

そのことから分る様に、二章から五章までの所は、前に述べたセデス氏の書を骨子として(むしろこれを祖述することによつて)成立つてゐる。その點についてはホール氏もほゞ同様である。(Hall. op. cit. p. vi) 現在セデス氏の研究を凌ぐ様な歐語の古代史概説が現われていないことを考へ合

わせば必ずしも非難すべきではないが、たとえば、セデス氏が結論の中で僅かに述べているに過ぎない回教傳來の章などは、いささか貧弱と云わざるを得ない。ジャワの回教王国について多くの紙数を費しているフライン・メース氏の「蘭印史」その他の例から見ても、もつと詳しく述べるべきではなかつたらうか。(もつとも、著者は回教の東南アジアに及ぼした影響を、局地的なものとするのであろうが、それにしても、後半に於て西洋勢力の浸透を、各地域毎に詳しく述べているのに比して、著しく見劣りがする。)

先ず二章から六章までの部分について見よう。概説書としての性質上、或る歴史事實に關して多くの説がある場合には、一應それらをふまえた上で、著者の意見を或る程度斷定的に出さねばならないが、その場合セデス氏の見解に従うことが多いのは、無理からぬことである。たとえば、驃(Pyu)をモン・クメール系とせずにティベット・ビルマ系とすること(p. 18. こゝはセデス氏の前掲書三二頁と甚だよく似ている。) Kalinga の音譯であるシナ側史料の「訶陵」を中部ジャワに比定しながら、その正確な位置は疑問とすること、(p. 26. Coedès p. 138) 扶南の語義をクメール語の山 *pnom* とすること、(p. 12) 等々、殆ど枚舉にいとまがない。その點本書の記述には危なげがないが、その代り大事をとり過ぎ

て新味に乏しい嫌いもある。強いてこの部分に缺點を求めるならば、佛教の大乗と小乗との説明があまりに便宜的で不充分であることや、(p. 14) 南詔國の譯語を *Country of the Southern Lord*、としているのはいささか不適當である、(p. 38) などの、未梢的なことに止まる様である。なお、文中には、「中世の」などと云う言葉が、軽い意味でしばしば用いられるが、(pp. 78, 133) これはもとより時代區分を意識しての、嚴密な用い方ではない。

さて、眼を轉じて後半を見ることにする。東洋と西洋との接觸に於て、貿易の意義を輕んずる事は不可能で、その點、著者が、香料貿易の必要や、少くとも當時はこれが東南アジアの、とくに所謂香料諸島の、特産であつたことなどを、力説している(pp. 42, 80) のは、當然でもあるし、その部分はかなりよく出来てゐる。その場合、諸國の植民の仕方の相違點に、しばしば著者が觸れる(pp. 69, 75, 84f., 91) のも、妥當であり、とくにイギリスの場合、東南アジア貿易が、他の諸國の場合の様に、輸入のみの片貿易ではなくて、自國の毛織物と新大陸の銀とを二つの頂點とする、三角貿易であつたことは、(p. 91) すでに云ひ古されている事ではあるが、こゝでも簡潔に要約されている。さらに、これら諸勢力の間の争鬭や、各地區の原住民の動向、ひいては本國の事情にま

で説き及びながら、重商主義的な貿易の時代から、イギリスを先驅とする自由貿易時代への移行を、かなり要領よくまとめている手腕はともかくも見事である。(尤もこれは、著者の把握の見事さと云うよりも、むしろ筆力の見事さである。)又、原住民と植民勢力との間の隙間、所謂「間接支配」の問題(pp. 80, 126)その間に介在する華僑(pp. 134f, 223 etc.)及びインド商人(pp. 221f, 224ff.)の立場などにも言

及し、「ファーンニヴァル氏の云う「複合社會」(plural society)の説(Furnival, J. S.: *Netherlands India. Cambridge 1938*, p. XV.)を裏づける(p. xi)など、多岐にわたる問題を相當よく整理してある。しかし、もう一步踏み込んで原住民の社會構造や、その商取引の實態などについて述べる所がないのは、ホールとほとんど同様である。歐米人の著わした概説書の常として、從來吾々はこの點に於てさほど多くを期待しなかつた。實際、たとえばパーセル氏の「東南アジアの華僑」(Purcell, Victor.: *The Chinese in Southeast Asia*. London. 1951)などにしても、華僑社會自身を對象としながら、ともすれば歐米人の立場よりする華僑對策論に陥るのであつた。しかし、ファン・ルール氏などが、既に十數年以前まだ不十分ながら大膽に土着社會の問題を扱つていたことを知り得る現在では、(Lieur, J. C. van.: *Indonesian*

Trade and Society. Essays in Asian Social and Economic History. The Hague & Bandung. 1955) 吾々の期待も當然今までとはちがつたものとなりつゝある。ハリスン氏の西洋勢力偏重を責めることも、この際無理ではないであらうし、今後の概説書に残された課題は、疑いもなく此處にあるであらう。

かくて列國の植民政策が、貿易による利潤の追及から、植民地内部の農業開發に轉じ、やがて帝國主義時代に及ぶ部分は、そのサンプルとして、主にオランダの東インド經營を前面に押出し、とくに強制栽培制度については、比較的詳細に説明しているが、(pp. 185—)ダーンデルスや、ラッフルズの改革の人道主義的ないし實際的な効果を認めながらも、「英國の東南アジア政策は、無爲と閑却のうちにありながら、とき／＼烈しい、——時には破局的な——改革を行う。ラッフルズのも、その一つである。」(pp. 173f. 大意)として、さほど高い評價を與えていないのは不可解である。その考え方に止まる限り、植民政策に於ける古さとか、新しさとか云うことは云えなくなり、惡しき相對主義に陥るのではあるまいか。

一方、著者の興味が、現實の植民政策の進展のみならず、より抽象的に、東西兩文化の交流と云う點にも向けられ、セ

デス氏などの文化史的興味と相通ずる所があるのは面白いことである。勿論その傾向は、本書の前半ではとくに著しいが、後半もまた例外ではない。たとえば、マラッカを中心とする *lingua franca* (ポルトガル語と土着語との混成語) や、歐亞兩人種の混血のことについて語る (p. 130) などは、セデス氏の古代史に於ける敘述と甚だ似通つて居り、從來の近代史概説書にもあまり見られない所でこの概説を特色づけている。著者の抱いている「歴史的發展」の概念の中核は、一口に云えば「文明化」である様に思われる。その最も適切な例は、ビルマに於ける英國の支配を外科の手術にたとえ、古い傳統をその病根に、ビルマを病人にたとえた一節である (p. 248) 著者によれば、東南アジアは過去二千年の間、アジアとヨーロッパのより高度な文化圏から文化を受動的に受け入れることに専念して來た (p. xi) のであり、とくに直接には西洋の近代思想が、この地域の民族主義を育てた (p. 289) とする。單純に、啓蒙する側と啓蒙される側とがあつて、後者が一定のレベルに達すると、啓蒙される必要がなくなる、と云う考え方の中には何らの矛盾も抵抗もなく、あまりにも明快である。それ故にこそハリスン氏に於ては、革命は西歐に對する叛逆であるだけでなく、彼ら自身の過去に對する反撥でもある (p. 236) のである。これを文字通りに受

取ることについて、私には異存はない。たしかに植民地化に伴うこのプラスの面は、從來云われることが少かつたかも知れないし、これを閑却することは、嚴密な意味で實證的とは云えないであらう。しかしそれかと云つて、マイナスの面までをこれによつて相殺出來るであらうか。たとえば十九世紀末以降の東南アジア各地に設けられた福祉施設は、(十七章) 植民地に於ける收奪の烈しさを補つて餘りあるであらうか。たま／＼その烈しさが説かれる場合でも、フィリッピンに於けるスペイン支配、東インドに於けるオランダ支配の場合ばかりがとり上げられて、それが植民地一般の問題とされていないことは、本書の價值を高めるゆえんではあるまい。私はここで植民國家の功罪を論じようとするのではない。むしろその様な全く性質の異なる二つの契機を機械的に天秤にかけて、平均値を求めようとする方法の方が、功罪を先ず考えようとする態度、云いかえれば價值判斷への傾斜を餘計に含んでいることを指摘したまでである。それ／＼の契機に固有の重味を認めつゝ先ず實態を掘り下げることこそが、「複合社會」を解く鍵ではないかと、私には思われる。

(財團法人東洋文庫研究生)